

# いじめ被害における 援助要請行動を抑制する要因の探索的検討

木村 真人 ・ 濱野 晋吾

## 問題と目的

### 1. 研究の背景

文部科学省の調査（文部科学省，2009）によれば，平成19年度のいじめの認知件数は101,097件で，前年度より約2万4千件減少したものの，依然として相当数に上ると報告されている。その中で，いじめの発見のきっかけは「本人からの訴え」が24.7%で最も多い一方で，いじめられた児童生徒の相談状況として「誰にも相談していない」生徒は8.3%と報告されている。

昨今のいじめ状況の深刻化を受けて発足した「子どもを守り育てるための体制づくりのための有識者会議」（文部科学省）による「いじめ問題などに対する喫緊の提案について」では，まずはじめに「子どもが様々な大人に相談できる場面をつくりましょう」との提案がなされている。しかし，他者に相談をする行動は必ずしも容易なことではなく，援助を要請する行動を抑制する要因がこれまでも多数指摘されている（水野他，2006；永井・新井，2007など）。上記の提案のように，子どもが大人に相談できる場面を作るためには，まず援助を求める側のいじめにあっている子どもが，大人を含めた他者に援助を求めることをどのように捉えているのかという援助要請行動に対する態度や意識を明らかにすることが先決であろう。

### 2. いじめ被害における援助要請行動の実態

いじめ被害における援助要請行動にはどのような特徴があるのだろうか。これまでにわが国においてもいじめ被害における援助要請行動の実態を明らかにする調査が行われている。

深谷・深谷（2003）は大学生1326名を対象に小中高時代に体験した「いじめ」についての質問紙調査を実施している。その結果，いじめにあったときに「相談した」者は女性が63.1%，男性が42.1%と女性の方が相談した者が有意に多かったと報告している。相談した相手では，男女ともに最も多かったのが「母親」（女性66.6%，男性68.6%）で，2番目は女性が「友だち」（49.3%），男性が「担任の先生」（37.3%），3番目は女性が「担任の先生」（28.0%），男性が「父親」（33.3%）であった。

中桐・岡本・澤田（2008）の大学生を対象とした調査では，いじめられ経験のある127名のとった対処行動の中で，誰にも相談しなかった者は26.0%であった。

また森田他（1999）はいじめ被害者959名に対する調査を実施している。いじめに対する援助要請に関連する項目に着目すると，いじめ被害者のいじめに対する行動として，最も多かったのが「気にしないふり」，2番目が「やめてという」，3番目が「だまっていじめられるままにした」と報告があり，概して消極的・抑圧的・回避的な行動をとる傾向があること

を指摘している。また、先生などに助けを求める割合は男女ともに低く、男性においては1割にも満たない。いじめについて話した相手は、友だちが最も多く、一方で誰にも言わない被害者は全体で33.4%に達し、男子では友だちに話す割合を上回った。

他にも本間（2006）は、いじめ被害経験のある中学生150名（男子59名、女子91名）を対象に質問紙調査を実施し、いじめ被害における実際のいじめへの対処について検討し、いじめ被害者の対処は男女で異なることを示している。男子ではいじめ加害者に向けて能動的な対処（「いじめる相手を見捨てる（51.0%）」、「いじめる相手にやめてほしいといった（48.1%）」）、またはいじめ加害者に対する回避的な言動を示す対処（「いじめのことを考えないようにした（40.8%）」、「誰にも言わずにがまんした（37.3%）」）といった直接的な対処を行う傾向があるのに対して、女子ではいじめ当事者ではない第三者への相談や新たな関係作りというサポート志向の間接的な対処（「友だちに相談した（62.1%）」、「自分の悪いところをなおそうとした（49.4%）」など）が多かった。男女での対処行動の比率を比較した結果でも、男子が有意に大きい項目として「誰にも言わずにがまんした」が、女子が有意に大きい項目として「友だちに相談した」、「親に相談した」があり、いじめ被害者の援助要請行動として男女差があることが示唆される。

以上のように、いじめ被害における援助要請行動の特徴として、他者に援助を求めない被害者が一定数存在すること、また男女によって援助要請行動の対象が異なることがあげられている。

### 3. いじめ被害における援助要請行動に関連する要因

では、いじめ被害における援助要請行動にはどのような要因が関連するのであろうか。

先に紹介した深谷・深谷（2003）の研究によれば、いじめにあっていたときに相談しなかった理由として、男女ともに半数を超えたのは、「他人に相談しても解決しないと思ったから」、「自分で解決することだから」、「時間がたてば、解決するだろうと思ったから」、「親に心配をかけたくなかったから」、「相談できる人がいなかったから」であった。このなかで、「自分で解決することだから」は男性に多く、「親に心配をかけたくなかったから」は女性に多かったと報告し、このような結果から、「いじめ」に対する大人の解決能力への不信感が基本的に存在する可能性を指摘している。また「いじめられていることを、先生に知られたいくなかったから」と「人に話すと自尊心が傷つくから」が、全体でそれぞれ4割を超えており、このことから、いじめの問題での援助要請は他の問題以上に自尊心が傷つくことへの恐れが抑制的に働くといえよう。このことは、Neary & Joseph（1994）のいじめ被害者の中には、自分自身がいじめを受けていることを認めない場合があるとの指摘からも、自分自身がいじめを受けていることを認めることが自尊心に脅威を与えられと考えられる。また、Newman（2001）は加害者との関係維持を望んでいるほど、先生に対して援助要請を行わないことを明らかにしている。

いじめ被害における援助要請行動に関連する要因については、以上のような要因が検討されているが、実証的な研究はまだ乏しい段階と言えよう。

### 4. 本研究の目的

以上のような問題意識から、本研究ではいじめ被害にあった時の、他者に援助を求める行

動を抑制する要因を抽出し、その関連を検討することを目的とする。なお本研究では、いじめ被害体験の有無を問わず、一般大学生を対象とした。その理由は、①倫理的配慮のため、②小中学生と比べ、大学生の方が言語化する能力がすぐれているため、③研究の方向性として、いじめに対する様々な立場からの認識の差を検討するために、いじめ被害者のみならず、いじめに関わる多様な立場の意見を収集する必要があるから、である。また本研究では質的な研究方法を採用した。その理由は、いじめ問題における援助要請行動を抑制する要因については先行研究が少なく、探索的研究と位置づけられるため、またより多くの要因を抽出することを目的とするからである。

なお、いじめの形態、および援助要請行動には性差が指摘されていることから、男女別に分析を実施した。

## 方 法

### 1. 調査対象

関東圏の大学の男子学生39名、女子大学生142名であった。

### 2. 調査手続

筆者が担当する講義時間を用いて質問紙調査を実施した。「いじめを受けている子どもが、周囲の人に助けを求めたいと思いつつも、助けを求められない理由として、どのようなことが考えられるでしょうか。その理由を具体的に書き、思いつく限りたくさん挙げてください。」と教示し、自由記述での回答を求めた。

### 3. 分析の手続き

得られたデータをKJ法（川喜田，1967）により分類・図解した。まずそれぞれの反応をカード化した。複数の内容が含まれる反応は一つの内容に分解し、男性では総計109個のカードが得られた。そのうち2個のカードは抑制要因とは認められず除外された。一人当たり、2.79個であった。女性では総計431個のカードが得られた。そのうち7個のカードは抑制要因とは認められず除外された。一人当たり、2.99個であった。次に、臨床心理士3名によりカードを分類しグループ編成を行い、それぞれのグループに名前をつけた。その後、各グループを空間配置し、関連性等を検討した。

## 結 果

### 1. 男性データの分析

表1は男性のいじめにおける援助要請行動を抑制する要因の自由記述について、KJ法により抽出されたカテゴリーとその件数を示したものである。分析の結果、大カテゴリーとして【援助要請行動自体に関連する要因】（43件：40.2%）、【援助要請行動以後の要因】（59件：55.1%）、【援助要請行動以外の状況・方略】（5件：4.7%）が得られた。なお以下、大カテゴリーは【 】, 中カテゴリーは[ ], 小カテゴリーは< >, 単独カテゴリーは「 」で示す。図1は抽出された援助要請行動を抑制する要因のカテゴリーについて図解したものである。

【援助要請行動自体に関連する要因】の大カテゴリーには[本人の援助要請行動に関する要

因] (21件：19.6%)，[いじめ状況の要因] (11件：10.3%)，[いじめが本人の援助要請行動に及ぼす要因] (11件：10.3%) の中カテゴリーが得られた。[本人の援助要請行動に関する要因] の中カテゴリーには、〈プライド〉、〈話すことが恥ずかしい〉、〈みじめ〉などの小カテゴリーが含まれ、本人の特性的な援助要請行動の特徴として、他者に援助を求めない傾向が示された。一方で [いじめ状況の要因] の中カテゴリーには〈誰にいじめられているのかわからない〉の小カテゴリーの他、いじめの形態として、援助要請行動を起こしづらい状況が生じて、援助要請行動が抑制されることが示された。この点は、いじめ特有の援助要請行動を抑制する要因と言えよう。[いじめが本人の援助要請行動に及ぼす要因] では、〈誰も信用できない〉、〈助けを求める相手がいない〉の小カテゴリーが含まれ、いじめ被害によって、他者への不信感が生じ、その結果として他者への援助要請行動が抑制されることが示された。

【援助要請行動以後の要因】には [いじめ状況悪化への心配] (23件：21.5%)，[心配をかけることへの懸念] (12件：11.2%)，[援助を求めた相手からの反応への心配] (10件：9.3%)，[周りに知られることへの恐怖] (4件：3.7%) の中カテゴリーが得られた。[いじめ状況悪化への心配] には〈仕返しや悪化への恐怖〉、〈助けを求めた相手からもいじめられる〉の小カテゴリーが含まれ、本人が他者に援助を求めようと考えたとしても、その結果として、さらにいじめ状況が悪化するのではとのネガティブな結果を予想することで援助要請行動が抑制させることが示された。また [心配をかけることへの懸念] では〈助けを求めた相手に迷惑がかかる〉〈心配をかけたくない〉の小カテゴリーが含まれ、いじめ被害にあった場合に、本人は、自身がいじめ被害の深刻な状況に置かれているにもかかわらず、援助要請行動を起こした結果として、援助を求めた相手や親に心配をかけることを懸念するということが示された。この結果より、いじめ被害における援助要請行動を促進するためには、いじめ被害者が抱える、他者に援助を求めることによって生じるであろうネガティブな結果の予期や周囲に心配をかけることへの懸念に配慮したアプローチが必要であろう。

【援助要請行動以外の状況・方略】には〈我慢すればおさまる〉、〈自分自身で解決したい〉などの小カテゴリーが得られ、消極的あるいは積極的にいじめ被害への対処方法として援助要請行動以外の対処方法を選択することが示された。

さらに以上の3つの大カテゴリーには属さない中カテゴリーとして、〈援助を求めても解決しない〉 (10件：9.3%) が抽出された。

以上の抽出されたカテゴリーの関連を検討すると、いじめ被害にあった場合には、【援助要請行動自体に関連する要因】、【援助要請行動以後の要因】が作用するために、いじめ被害者の援助要請行動に対する有効性の評価は低下し、[援助を求めてもいじめは解決しない] だろうと考え、その結果、【援助要請行動以外の状況・方略】として〈我慢すればおさまる〉とさらに援助要請行動が抑制されたり、〈自分自身で解決したい〉と援助要請行動以外の方略を選択すると考えられる。

表1 抽出されたカテゴリーとその件数（男性）

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー、単独カード	件数	
Ⅰ. 援助要請行動自体 に関連する要因 43件（40.2%）	1. 本人の援助要請行動に 関する要因 21件（19.6%）	プライド	5	
		話すことが恥ずかしい	4	
		みじめ	2	
		性格	2	
		いじめられていることがはずかしと思う	1	
		弱い部分を見せたくないから	1	
		自分がいじめられてると思いたくない	1	
		自分が負けたような気がするから	1	
		自分の置かれている状況を人に打ち明けるのに抵抗がある	1	
		いじめられていることはそれ自体が苦しい経験で、それを言語化することは、自ら恐怖に向かうことであって、相談すること自体が困難な場合	1	
	2. いじめ状況の要因 11件（10.3%）	弱みを出したら、負けるとってしまう	1	
		勇気が出ない	1	
		誰にいじめられているかわからない	3	
		脅迫というのが多い気がする	1	
		陰湿ないじめで弱みを握られたりするから	1	
		性に関するいじめが多い	1	
		結局、一番近くにいるのは、いじめている人。	1	
		いじめている子もいじめられ、いやいや命令されているから	1	
		いじめてくる人がクラスのリーダーだから	1	
		第三者はいじめの状況を理解していない	1	
	3. いじめが本人の援助要請行動に及ぼす影響 11件（10.3%）	クラスのみんなからいじめられているから	1	
		誰も信用できない	5	
		助けを求める相手がいない	4	
		援助を求める適切な相手がわからない	1	
		友達が本当の友達じゃないから	1	
	Ⅱ. 援助要請行動以後 の要因 59件（55.1%）	4. いじめ状況悪化への心配 23件（21.5%）	仕返しや悪化への恐怖	20
			助けを求めた相手からもいじめられる	2
			先生に言って、先生がいじめた友人を呼んで、注意してもよけいひどくなる	1
		5. 心配をかけることへの懸念 12件（11.2%）	助けを求めた相手に迷惑がかかる	8
			心配かけたくない	4
		6. 援助を求めた相手からの反応への心配 10件（9.3%）	真剣に対応してもらえない	2
			友達だと思っている人から、冷たくされ、嫌われるのが怖い	1
誰かに助けを求めることにより、いじめっ子から弱虫と思われるから			1	
いじめのことを相談すると馬鹿にされるんじゃないかという気持ちがあるかもしれないから			1	
すでにしたが裏切られた。相手にされなかった			1	
「〇〇さんはいじめられような人なんだ」と助けを求めようとする相手にマイナスの印象を与えてしまうから			1	
周囲の人に自分がいじめられていると認識されたくない			1	
話すとなめられそうになる			1	
7. 周りに知られることへの心配 4件（3.7%）		助けを求めることを馬鹿にされて、また傷つく	1	
			4	
Ⅲ. 援助要請行動以外の 状況・方略 5件（4.7%）		8. 援助を求めても解決しない 10件（9.3%）	我慢すればおさまる	3
			自分自身で解決したい	1
	より大きな苦難に直面していて最優先じゃない		1	
			10	

計107

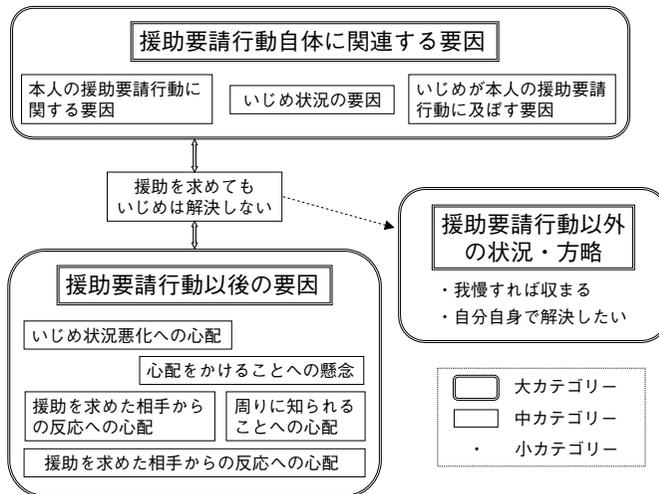


図1 カテゴリーの図解（男性）

## 2. 女性データの分析

表2は女性のいじめにおける援助要請行動を抑制する要因の自由記述について、KJ法により抽出されたカテゴリーとその件数を示したものである。分析の結果、大カテゴリーとして【援助要請行動に伴ういじめや友人関係の悪化への懸念】（145件：34.2%）、【援助要請行動に対する内的抵抗感】（128件：30.2%）、【援助要請行動への評価】（63件：14.9%）、【環境要因】（55件：13.0%）、【援助要請行動以外の状況・方略】（23件：5.4%）が得られた。図2は抽出された援助要請行動を抑制する要因のカテゴリーについて図解したものである。

【援助要請行動に伴ういじめや友人関係の悪化への懸念】の大カテゴリーには[いじめ状況の悪化への懸念]（127件：30.0%）、[友人関係悪化への懸念]（18件：4.2%）の中カテゴリーが得られた。[いじめ状況の悪化への懸念]の中には〈いじめが悪化・エスカレートすることへの恐怖〉、〈相談がばれて悪化することへの恐怖〉、〈相談相手を巻き込みたくない〉などの小カテゴリーが得られた。[友人関係悪化への懸念]には〈友人関係が壊れることへの不安〉、〈自分から離れていってしまうことへの不安〉などの小カテゴリーが得られた。

【援助要請行動に対する内的抵抗感】には[心配かけたくない]（46件：10.8%）、[恥ずかしい]（30件：7.1%）、[知られたくない]（12件：2.8%）、[援助要請行動に対する困難感]（9件：2.1%）、[いじめられていることを認めたくない]（7件：1.7%）、[他者からの評価への懸念]（7件：1.7%）の中カテゴリーが得られた。その中で[心配かけたくない]には〈親に心配をかけたくない〉、〈親を悲しませたくない〉などの小カテゴリーが、[恥ずかしい]には〈いじめられているのが恥ずかしい〉、〈いじめられていることを打ち明けるのが恥ずかしい〉などの小カテゴリーが得られた。

【援助要請行動への評価】の大カテゴリーからは[援助要請行動に対する無価値感]（33件：7.8%）、[援助者の否定的反応への懸念]（30件：7.1%）の中カテゴリーが得られた。[援助要請行動に対する無価値感]には、小カテゴリーとして〈援助を求めても助けてくれない〉、〈援助を求めても解決しない〉などが、[援助者の否定的反応への懸念]は〈真剣に対応

表2 抽出されたカテゴリーとその件数（女性）

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー、単独カード	件数	
I. 援助要請行動に伴ういじめ や友人関係の悪化への懸念 145件（34.2%）	1. いじめ状況の悪化への懸念 127件（30.0%）	いじめが悪化・エスカレートすることへの恐怖	55	
		相談がばれて悪化することへの恐怖	26	
		相談相手を巻き込みたくない	25	
		相談相手の対応による状況悪化への不安	9	
		仕返しの恐怖	7	
	2. 友人関係悪化への懸念 18件（4.2%）	大事になることへの不安	5	
		友人関係が壊れることへの不安	5	
		自分から離れていってしまうことへの不安	4	
		嫌われることへの不安	2	
		裏切られることへの不安	2	
	II. 援助要請行動に対する内的 抵抗感 128件（30.2%）	3. 心配かけたくない 46件（10.8%）	いじめ加害者との関係性悪化への不安	2
			その他	3
			親に心配をかけたくない	32
			親を悲しませたくない	9
			親に迷惑をかけたくない	3
4. 恥ずかしい 30件（7.1%）		人に心配をかけたくない	2	
		いじめられているのが恥ずかしい	15	
		いじめられていることを打ち明けるのが恥ずかしい	7	
		いじめられていることを知られるのが恥ずかしい	4	
		誰かに助けを求めるのが恥ずかしい	1	
5. 知られたくない 12件（2.8%）		その他	3	
		人に知られたくない	7	
		親に知られたくない	5	
		話す勇気が出ない	3	
		言いづらい	3	
6. 援助要請行動に対する困難感 9件（2.1%）	自己表現の困難	3		
	7. いじめられてることを認めたくない 7件（1.7%）		7	
	8. 他者からの評価への懸念 7件（1.7%）	ブライド	5	
		遠慮	2	
		大人が介入することへの拒否感	2	
いじめをする人を信じている		2		
その他		6		
III. 援助要請行動への評価 63件（14.9%）	9. 援助要請行動に対する無価値感 33件（7.8%）	援助を求めても助けてくれない	15	
		援助を求めても解決しない	11	
		先生に行っても何もしてくれない	3	
		過去の援助要請行動に対する否定的評価	2	
		その他	2	
	10. 援助者の否定的反応への懸念 30件（7.1%）	真剣に対応してもらえない	8	
		相談したことがばれる	6	
		自分が責められるかもしれない	4	
		いじめ状況の否定	2	
		理解してもらえない	2	
	IV. 環境要因 55件（13.0%）	11. いじめ状況 40件（9.4%）	信じてもらえない	2
			その他	6
			相談できないいじめ状況	19
			自分が悪いと思ってしまう	5
			チクるなど脅されている	4
12. 適切な援助要請選択の困難状況 15件（3.5%）		先生がいじめに関与	3	
		弱みを握られている	2	
		自分に非がある	2	
		いじめられて人を信用できない	2	
		その他	3	
V. 援助要請行動以外の状況・ 方略 23件（5.4%）		助けを求められる人がいない	11	
		誰に助けを求めたらよいかわからない	3	
		その他	1	
		我慢	7	
		自己解決志向	5	
13. 誰も信じられない 10件（2.4%）	時間が解決	5		
	気にしない	2		
	その他	4		

してもらえない), 〈相談したことがばれる〉などの小カテゴリーが得られた。

【環境要因】には [いじめ状況] (40件:9.4%), [適切な援助者選択の困難状況] (15件:3.5%) の中カテゴリーが得られた。[いじめ状況] には, 小カテゴリーとして 〈相談できないいじめ状況〉, 〈自分が悪いと思ってしまう〉などが, [適切な援助者選択の困難状況] には 〈助けを求められる人がいない〉, 〈誰に助けを求めたらよいかわからない〉など小カテゴリーが得られた。

【援助要請行動以外の状況・方略】には小カテゴリーとして 〈我慢〉, 〈自己解決志向〉, 〈時間が解決〉などが見られた。

その他に, [誰も信じられない] という中カテゴリーが10件 (2.4%) 得られた。

以上の抽出されたカテゴリーの関連を検討すると, 【援助要請行動への評価】は, 様々な要因に影響を与えていたり, 相互に関連しあったりしていることが考えられた。例えば, 〈援助を求めても助けてくれない〉, 〈相談したことがばれる〉といった評価から, 〈いじめが悪化・エスカレートすることへの恐怖〉や〈相談がばれて悪化することへの恐怖〉が増長されたり, 逆にそういった恐怖から〈相談したことがばれる〉のではないかとか, 〈真剣に対応してもらえない〉のではないかとといった懸念が増大したりすることが考えられた。また, こうした援助要請行動への否定的評価や無価値感から 〈我慢〉とか 〈時間が解決する〉といった別の方略を選択することも考えられた。

さらに, [誰も信じられない] という中カテゴリーには, いじめ状況自体がいじめ被害者にそのような思考や感情を抱かせること, その [誰も信じられない] という状態が 〈援助を求めても助けてくれない〉, 〈真剣に対応してもらえない〉, 〈理解してもらえない〉といった否定的な援助要請行動への評価に結び付き, ますます孤立無援な [誰も信じられない] 状態が維持されてしまうことが考えられた。

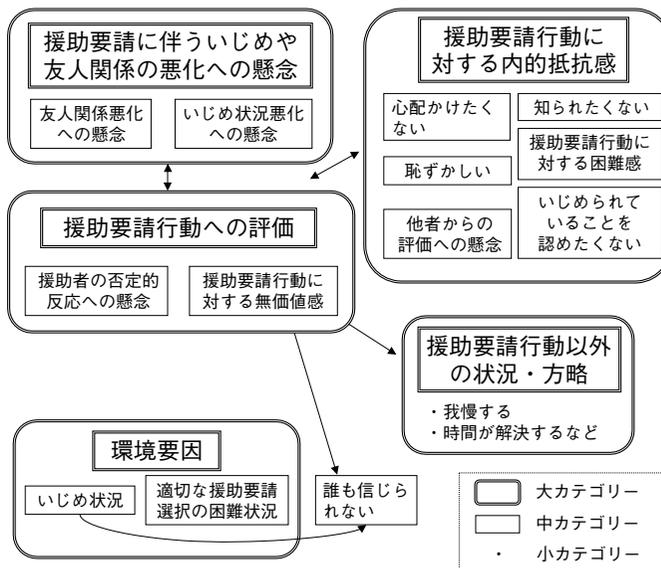


図2 カテゴリーの図解 (女性)

## 考 察

本研究では、いじめ被害にあったときの他者に援助を求める行動を抑制する要因を抽出し、その関連を検討することを目的に、質問紙調査を実施し自由記述データの質的分析を男女別に行った。分析の結果、いじめ被害における援助要請行動を抑制する要因として、男女ともに類似の要因が見られたことから、男子のいじめ被害における援助要請行動を抑制する要因のモデルを基に以下に考察を加える。

### 1. 援助要請行動自体に関連する要因について

援助要請行動自体に関連する要因について、[本人の援助要請行動に関する要因]、[いじめ状況の要因]、[いじめが本人の援助要請行動に及ぼす要因]の3要因に分類して考察を加える。

[本人の援助要請行動に関する要因]には〈プライド〉、〈恥ずかしい〉、〈いじめられていることを認めたくない〉といったものが含まれており、それらの項目は女性にも見られた。これらより、援助要請行動をとるにあたって、自尊感情との関連から援助要請行動が抑制される傾向があると考えられた。それは援助要請行動をとらないことで自らの自尊感情を保っている側面を示唆するものでもあり、援助要請行動における主体性の視点を援助者に示唆していると言えよう。

次に [いじめ状況の要因] としては〈誰にいじめられているかわからない〉などがあり、女性でも中カテゴリーとして [いじめ状況] が挙げられている。その他の項目も含め、いじめの形態自体が、援助要請行動を起こしづらい状況を作り出し、援助要請行動が抑制されることが考えられた。

また、[いじめが本人の援助要請行動に及ぼす要因]には、〈誰も信用できない〉が含まれており、女性でも [誰も信じられない] が中カテゴリーとしても抽出されている。これは、いじめによる対人関係での傷つき体験自体が、いじめ被害者にとって、他者全般への信頼感を損なわせていくものとして体験されていくことの影響と考えることもできる。例えば、誰かがいじめを発見した場合でも、あるいは心理教育プログラムの提供者として生徒たちの前に立った場合でも、既にいじめを受けている被害者にとっては、目の前の援助者となりうる人さえも [誰も信じられない] 対象になってしまっている可能性は十分に考えられる。そのことを自覚して関わるということは、援助者側の姿勢として心掛けておくべきことと考えられる。

### 2. 援助要請行動以後の要因について

援助要請行動以後の要因について [いじめ状況悪化への心配]、[心配をかけることへの懸念]、[援助を求めた相手からの反応への心配]の3点について考察を加える。

まず、[いじめ状況悪化への心配]には、〈仕返しや悪化への恐怖〉があり、女性でも〈いじめが悪化・エスカレートすることへの恐怖〉が見られた。これらより、本人が他者に援助を求めようと思っても、その結果としてさらにいじめ状況が悪化するのではないかという恐れから援助要請行動が抑制されることが考えられた。

次の [心配をかけることへの懸念]には、〈助けを求めた相手に迷惑がかかる〉、〈心配をかけたくない〉が含まれており、女性でも中カテゴリーとして [心配をかけたくない] が46件、小カテゴリーとして〈相談相手を巻き込みたくない〉が見られた。本人自身がいじめ被害の

深刻な状況に置かれているにも関わらず、他者や親などに迷惑をかけることを懸念して援助要請行動が抑制されることが考えられた。そのような懸念に配慮した関わりが必要であろう。

[援助を求めた相手からの反応への心配]には、〈真剣に対応してもらえない〉などが含まれており、女性でも〈真剣に対応してもらえない〉が見られた。また〈相談したことがばれる〉も男女ともに見られた。こうした援助者の反応を懸念して援助要請行動が抑制される側面が考えられた。これらは、例えば学校現場での生徒同士のピア・サポート活動においては、相談相手が真剣に対応してくれるかどうかを相談者は不安に感じているということ、サポートを提供する立場として生徒に理解させるように取り組むことがより効果的な活動につながるのではないかと考えられる。また同時に相談活動における守秘義務の取扱いについても、事前に伝えていくことが他者に援助を求める行動にもつながっていくのではなかろうか。

### 3. 援助要請行動への評価

次に援助要請行動への評価について考察する。女性では[援助要請行動に対する無価値観]や男性では[援助を求めても解決しない]のカテゴリーが抽出され、援助要請行動に対する有効性の否定的評価が抑制要因の一つとして存在することが明らかとなった。では、一体どのような要因により、このようないじめ被害における援助要請行動の有効性に対する否定的な評価が生じるのであろうか。本研究の結果より、援助要請行動への評価に関するカテゴリーは、上述した援助要請行動自体に関連する要因と援助要請行動以後の要因が、ともに関連を示していた。このことより、それらの抑制要因が生じた結果として、援助要請行動に対する有効性の評価が低まると考えることができる。したがって、援助要請行動自体の要因や援助要請行動以後の要因にアプローチすることは、いじめ被害者における援助要請行動の有効性に対する評価を高めることにもつながる可能性が示唆される。

さらに援助要請行動の有効性に対する評価を直接高めるアプローチも考えられる。坂西(1995)はいじめについて他者に援助を求めることとその解消との関連を検討している。その結果、友人、家族、先生に援助を求めることがいじめの解消に関連していることを明らかにし、特に友人に援助を求めることがいじめ事態を改善することを指摘している。一方で、無抵抗の場合には、いじめが悪化したり同じ状態が持続することから、当人の積極的な対応がいじめを抑えると指摘している。したがって、心理教育的アプローチとして、このような研究知見を情報提供として児童・生徒に伝えることで、いじめ被害における援助要請行動の有効性の評価が高まり、援助要請行動を促進することにつながると考えられる。ただし、援助要請行動への評価について土本・中谷(2001)は年齢が上がるといじめに対するサポートの有効性評価が低くなると報告している。本研究の対象者が大学生であることから、実際の児童生徒の年齢における援助要請行動への評価を明らかにした上で、その結果に即した心理教育的アプローチが望まれる。

### 4. 援助要請行動以外の方略の要因

いじめ被害に対する対処行動は援助要請行動だけではない。男女ともに[援助要請以外の状況・方略]のカテゴリーが抽出され、積極的にあるいは消極的に援助要請行動以外に対処方法を選択することが明らかとなった。ここで注目する点は、援助要請行動への有効性の評

価が低いために、消極的に援助要請行動以外の方略が選択される可能性である。女性の〈我慢〉〈時間が解決〉、男性の〈我慢すればおさまる〉といった消極的な対処方略の選択が、その背景に他者に援助を求めることへの無価値感を有していることが示唆される。さらに、女性の〈自己解決志向〉、男性の〈自分自身で解決したい〉という一見、積極的に対処方略を選択している場合においても、その背景には他者に援助を求めても解決しないだろうという有効性の評価の低さが存在することも考えられる。したがって、この点においても、他者に援助を求めることの有効性を高めるアプローチは重要であると考えられる。

#### 5. いじめ被害における援助要請行動を抑制する要因の性差

本研究の結果、いじめ被害における援助要請行動を抑制する要因においては、男女において共通する要因が多く認められた。先行研究の援助要請行動については性差が指摘されている知見とは異なる結果が得られた。本研究では質的データの分析のため、要因間の関連や影響の大きさについては検討できておらず、したがってそのような要因間の関連や影響の大きさにおける男女差については本研究結果からは導くことができない。この点については今後のさらなる検討が待たれる。

#### 6. 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題を指摘したい。

本研究の限界としては、男性サンプル数の低さのために、十分なカテゴリーが抽出できていない可能性が考えられる。また、カテゴリーに含まれる回答の件数が少ないために、十分に量的な側面から男女差の検討が出来なかった点があげられる。今後さらなる追試的な検討が望まれる。

今後の課題としては、本研究で得られた抑制要因やいじめの立場による抑制要因の差異などについて、量的な研究方法を用いて実証的に検証することが望まれる。また本研究で得られた要因以外にも、いじめに限定されたものではないが、援助要請行動を促進したり、被援助志向性を高めたりする要因として援助要請スキル（阿部・水野・石隈, 2006）や過去の援助要請経験・認知度（水野, 2007）などが挙げられている。これらがいじめの問題においてどのように関連しているか、また援助要請行動を抑制する要因との相互関連はどのようになっているかなどの研究も今後進めていくべきであろう。

#### 付 記

本研究は日本心理臨床学会第28回秋季大会で発表したものを加筆・修正したものである。

## 【引用文献】

- 阿部聡美・水野治久・石隈利紀 2006 中学生の言語的援助要請スキルと援助不安, 被援助志向性の関連 大阪教育大学紀要 教育科学, 54 (2), 141-150
- 深谷昌志・深谷和子監修 2003 『いじめ』の残したモノ モノグラフ・小学生ナウVOL.23-2 (ベネッセ未来教育センター)
- 本間友巳 2006 いじめ被害中学生によるいじめへの対処と解決—いじめ被害者への支援に向けて— 京都教育大学紀要, 108, 143-150.
- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために 中央公論社
- 水野治久 2007 中学生が援助を求めるときの意識・態度に応じた援助サービスシステムの開発 科学研究費補助金(基盤研究C(1)) 研究成果報告書(課題番号16530423)
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 2006 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から— カウンセリング研究, 39, 17-27.
- 文部科学省 2009 平成19年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について—公表資料 文部科学省2009年6月12日 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/\\_icsFiles/afieldfile/2009/06/18/1278479\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2009/06/18/1278479_1_1.pdf)> (2009年11月26日)
- 森田洋司・秦 政春・若井弥一・滝 充・星野周弘(編) 1999 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集 金子書房
- 永井 智・新井邦二郎 2007 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55 (2), 197-207.
- 中桐佐智子・岡本陽子・澤田和子 2008 いじめを受けた時の自覚症状と対処行動に関する研究 吉備国際大学保健科学部紀要, 13, 27-34.
- Neary, A., & Joseph, S. 1994 Peer victimization and its relationship to self-concept and depression among schoolgirls. *Personality and individual differences*, 16 (1), 183-186.
- Newman, R. S., & Murray, B., & Lussier, C. 2001 Confrontation with aggressive peers at school: students' reluctance to seek help from the teacher. *Journal of Educational Psychology*, 93, 398-410.
- 坂西友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11 (2), 105-115.
- 土本恵美・中谷素之 2001 いじめに対するサポートの有効性: 教師及び友人によるサポートの有効性認知に関する発達の变化 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 565